

ニタイ・ト

☎487-2332

からの**お便り** 第10号



今年はコロナ禍の一年となり、博物館でも感染予防対策に追われました。道内外の観光客も多く来館される博物館では、人気だった「体験できる昔の電話」の使用を中止するなど、触れる体験展示は行っていません。工夫をして早く元の展示形態に戻れば…と模索しています。

コロナ時代のニタイ・ト見学のススメ!!

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、新しい生活様式が提案されています。不特定多数の方が来館されるニタイ・トでは、来館される方へ以下の対応をお願いしています。

個人見学のススメ!

- 来館される方にはマスクの着用をお願いしています。
- 入館の際に手洗い消毒と検温をお願いしています。
- 館内では1階のみ飲み物を飲むことが可能ですが、1階での食事と2階での飲食はご遠慮いただいています。

団体見学のススメ!

- 個人見学と同様に、マスクの着用と入館時の手洗い消毒、検温をお願いしています。
- 1回の入館上限を20人としています。それ以上の人数の場合は、2回に分けて入館いただくようお願いしています。
- 飲食に関しては個人見学と同じく、1階で飲み物を飲むこと以外はご遠慮いただいています。

ご自身やほかの来館者の身を守るため、ご理解とご協力をお願いします。また館内では、定期的に手の触れるような箇所は適時消毒をしています。安心してご来館ください。



くまもと

標茶近世・近代人物誌 第5話

軍馬補充部川上支部

第14代支部長 桑田 貞三 (後編)

標茶に生きた人々の中には、伝記のような形で記録され、歴史にその名を残した方がいます。そんな人々の人生の物語をご紹介します。今回は前号に引き続き、軍馬補充部川上支部長、桑田貞三をご紹介します。

1888年(明治21年)、広島県に生まれた桑田は騎兵将校として活躍。1935年(昭和10年)8月に軍馬補充部川上支部長として着任。当時の階級は陸軍中佐で、47歳でした。

桑田着任時の川上支部は整備が完了し安定した時期でした。当時の日本の情勢は満州帝国建国、そして国際連盟脱退と国際的な孤立を深めていきましたが、標茶の人々にさほどの危機感はなかったと記録されています。むしろ1935年には標津線の工事に着手、翌年には北海道製糖磯分内工場の操業を控えるなど、町には活気が溢れていました。人口も増加傾向にあり、1935年には8627人に上っています。桑田がいた時期の川上支部は記録がよく残されており、活動をつかむことのできる時期です。川上支部における同年の保管馬数は1602頭。標茶村全体の一般馬総数は3160頭で、いかに軍馬補充部の保管馬数が多かったかが分かります。また川上支部では毎年300頭以上の2〜3歳馬を一般の農家より購入し、同数近い保管馬を陸軍師団などへ供給していました。このように川上支部とそれを支えた一般農家の馬産業が活発化した一因には、砲兵輓馬として最適の体格を備えていたといわれる釧路地方の特産馬「日本釧路種」が1832年(昭和7年)に誕生したことも影響を与えていたことでしょう。現在、釧



大柴毛駅前の日本釧路種銅像

今年も博物館の暖炉に火がとまります

毎年、皆さんからご好評いただいている暖炉ですが、12月5日(土)から土日限定でまきがくべられます。暖炉がある1階ラウンジは無料の休憩スペースとなっていますので、暖炉の火を眺めながらゆったりとした時間を過ごせます。なお、暖炉は12～5月の冬季限定となっています。皆さんの来館をお待ちしています。



いきもの発見日和



File.5 アオサギとヌマガレイ

発見日 10月

ヌマガレイを捕まえて得意げな様子のアオサギを塘路湖で発見しました。この個体のすぐ後ろでは若いアオサギの個体が様子を見ていました。

アオサギの狩りは、水辺に立ち、餌が近づいてくるのをじっと待つ、待ち伏せスタイルです。餌が近づいてきたところで、長いくちばしを使って素早く捕まえます。大きな魚の時は、くちばしで魚を刺して捕まえることもあるそうです。

[参考文献] 北海道野鳥図鑑 (2004) 亜璃西社

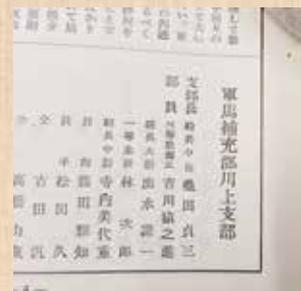
路市の大楽毛駅に銅像が残る日本釧路種は、日本で誕生した唯一の馬の品種となっています。

桑田は1936年(昭和11年)に発行された「標茶記念誌」にその名前が見られるほか、1937年(昭和12年)3月に川上支部から転任する際に写された記念写真が残っています。

桑田が標茶を去った4カ月後、盧溝橋事件が起き、日中戦争へと発展しました。桑田は中国大陸へと渡り、騎兵第十連隊長に着任。その後も指揮官として各隊を渡り歩きながら転戦しました。最後は陸軍少将として1945年(昭和20年)7月に編成された独立混成第130旅団長となり、奉天(現中華人民共和国瀋陽市)で終戦を迎えました。ソ連軍によって武装解除された後は、カラガンダ第10収容所(現カザフスタン共和国カラガンダ)に収容されます。カラガンダでは多くの日本兵捕虜が収容され、炭鉱採掘などに従事しました。桑田のその後は不明ですが、1959年(昭和34年)に71歳で亡くなっていることが分かっており、カラガンダの強制労働から生きて日本へ戻ることができたと思われる。桑田にとって、標茶は穏やかに軍務を務めることができた最後の赴任地だったのかもしれない。

主要な参考文献・引用文献

- ・「日本陸軍将官辞典」 2001年 福川秀樹・著 芙蓉書房出版
- ・「標茶記念誌」 1936年 高橋虎・編著 洗硯書院
- ・「釧路産馬発達ノ概要」 1936年 釧路畜産組合
- ・「軍馬補充部川上支部と標茶その① 標茶町郷土館報告第18号」 2006年 坪岡 始
- ・「標茶町史通史編 第1巻」 1998年 標茶町役場
- ・「標茶町史通史編 第2巻」 2001年 標茶町役場
- ・JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C12122427500、8画像目。C14020874600、7画像目。C12121203900、7画像目。



「標茶記念誌」に見られる職員